



● 伏見 康治氏 (物理学者)
● 中曽根 康弘氏 (衆議院議員)
**黎明期、
そして今後の原子力開発は**

インド・パキスタンの核実験は、極地紛争が多発する国際社会に、新たな緊張をもたらしました。わが国は、一九七六年に核不拡散条約に加盟して原子力平和利用に徹していますが、その出発は決して順調なものではありませんでした。黎明期に立ち会われたお二人に、将来を見据えつつ歴史への証言をお願いしました。

● 司会・尾崎正直氏

(科学技術ジャーナリスト)



原子力文化

特別対談 黎明期、そして今後の原子力開発は
伏見 康治・中曽根 康弘



7

原子力文化 VOL.29 No.7
© 財団法人日本原子力文化振興財団
〒105-0004 東京都港区新橋1-1-13

出典：「原子力文化」VOL.29 No.7
Copyright 財団法人日本原子力文化振興財団

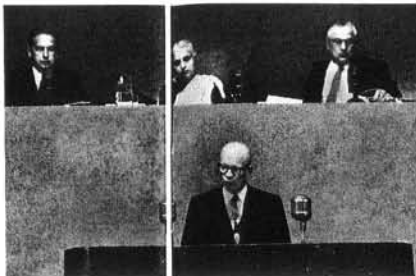
原子力予算は茅さん伏見さんへの応援の意味が

尾崎 アイゼンハワーが一九五三年（昭和二八）の二月八日、国連で「アトムズ・フォア・ピース」（平和のための原子力）を提唱しましたね。これをきっかけに、アメリカが独占し、今まで秘密のベールに閉ざされていた原子力が、初めて平和利用できそうな方向に向かって踏み出したわけです。

それから三か月経たないうちに、わが国でいきなり原子力予算二億三五〇〇万円というものが出てきた。これは中曽根さんがお作りになったわけですが？

中曽根 これは茅誠司（当時、日本学術会議会長）さん、伏見康治さんを応援する意味があつたんです。その前に学術会議で、二度ほど「原子力の研究を開始しよう」という動議が出されたのですが、共産党の民科（民主主義科学者協会）につぶされたんです。それで、このまま学術者に任せておいたら、永久にできないと思つた。

アイゼンハワー大統領の「アトムズ・フォア・ピース」演説（1953.12）



たまたま私はアメリカへ渡つて、ハーバードのキッシンジャー・ゼミに出たんですが、その帰りに

尾崎 嵯峨根先生に、どうして目をつけられたんですか。

中曽根 ローレンスに嵯峨根さんがいるという事は、聞いて知つていたので、元来、私は原子力には非常に関心をもつていた。私の家内の父親が小林儀一郎という地質学者なんです。戦争中、私は海軍にいましたが、原子力の話を聞いていた。それで、ウランが日本にないかと探したんです。海軍省兵備局におり、その後軍務局において、その仕事もやって、

- 一九五二年（昭和二十七年）
一〇月 日本学術会議総会で、原子力開発の必要性を訴える茅・伏見提案を提出
- 一九五三年（昭和二十八年）
二月 アメリカのアイゼンハワー大統領が国連総会で原子力の平和利用に関する「アトムズ・フォア・ピース」を提唱
- 一九五四年（昭和二十九年）
三月 保守三党提出の、昭和二十九年度原子炉築造予算二億三五〇〇万円成立
- 一九五五年（昭和三十年）
四月 日本学術会議が、公開・自主・民主の三原則を謳った原子力平和利用に関する声明を発表
- 一九五五年（昭和三十年）
二月 初の欧米原子力事情調査団（藤岡ミツシヨ）を派遣
- 一九五五年（昭和三十年）
八月 第一回原子力平和利用国際会議（ジュネーブ会議）を開催
- 一九五六年（昭和三十一年）
一月 原子力三法（原子力基本法、原子力委員会設置法、原子力局設置に関する法律）の施行

日本にはないということがわかつたんです。尾崎 それはすごいですね。

中曽根 だから、ある程度知つていたわけですよ。それに、たまたま高松に行ったときに広島島の原爆があつて、朝八時頃、白いものすごい雲が巻き起こつたんです。同じ時刻でしたから、そうじゃないかと思う。そのイメージが非常に頭にあつた

アメリカの原子力施設を見て回つたんです。その頃、アメリカはちょうどアイゼンハワーの「アトムズ・フォア・ピース」から、いわゆる原子力産業会議を作つて民間に委譲する、というときに入つたわけです。軍部が持つていた原子力のいろんな秘密や技術を民間に委譲してやらせる。「アトムズ・フォア・ピース」はそこに山があつて、それを開始したときだったんです。そういう情勢を私は見て、日本でもやらないと遅れる、と。

中曽根 たまたまキッシンジャー・ゼミに招待されて、二八年に行つたんです。帰りにそういった状況をニューヨークでも見聞して、サンフランシスコへ寄つてパークレーのローレンス研究所に嵯峨根遠吉教授がいましたので、総領事館に呼んで、日本はどうしたらいいか、ということを彼に質問したんです。そうしたら「長期的に国策を確立しなさい。そのためには、法律と予算を正式に作つて、この政策は動かない、というようにしなさい。国家がそういうふうな正式にやらないと、非常に無責任な状態になり、非常に乱脈になる。国策が確立して、国家がしっかりやらないと、いい学者が集まらない、そういうことを言われた。



伏見 康治氏（ふしみ・こうじ）

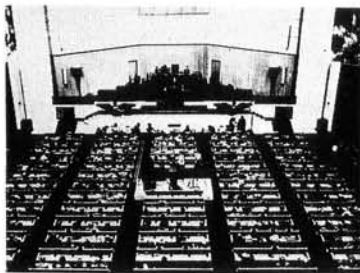
1909年 名古屋生まれ。物理学者。大阪大学・名古屋大学名誉教授。東京大学助手、阪大理学部助手、教授、理化学部長、名大アラスマ研究所長、日本学術会議副会長などを務める。著書に「伏見康治著作集」（全8巻）、「時代の証言」などがある。



中曽根 康弘氏（なかそね・やすひろ）

1918年 群馬県生まれ。衆議院議員、アジア・太平洋議員フォーラム会長、(財)世界平和研究所会長。1947年衆院初当選。保守合同後は、自民党河野派に属し、59年岸信介内閣で科学技術庁長官で初入閣。以後、党および内閣の要職を数々歴任。最新刊に「日本人に言っておきたいこと」などがある。

から、戦争が終わって復員してもそのことがずつと頭にあつて、そこで、昭和二五年、朝鮮戦争が始まる前にマッカーサーに建白書を出したことがある。「プレゼンテーション・トゥ・ジェネラル・マッカーサー」というのです。それを産経新聞が書いてくれた。講和条約のときに、「原子力の平和利用と民間航空機の製造・保有を講和条約で制限するな」という注文を出したんです。それから講和条約の交渉にダレスがきて、三木武夫と吉米地儀三と私がダレスに会つて、同じようなことを出した。尾崎 ダレスは聞いていましたが、マッカーサーに、というのは驚きましたね。中曽根 なぜかといえはマッカーサーがきて、品川沖に仁科芳雄博士がつくつた原子力の基礎研究の道具であるサイクロトロンを捨てたでしょう。そういう情勢を見て、非常に心配してはいたんです。尾崎 私も昭和二十一年、学生時代と同じようなことを朝日新聞の「声」欄に……。中曽根 そういう因縁があつたので、伏見さんと茅さんが学術会議でやつているのを注目してはいたわけです。ところが、民科が反対して、二回とも挫折したんです。それで、これは政治がたき破る以外にないと、嵯峨根さんの助言を入れて実行したんです。伏見 民科は共産党に躍らされているだけのもので、元来は文字通り民主主義だつたと思います。



第1回ジュネーブ会議 (1955.8)



米ソ対立が解けるまで手を出さなという演説も

中曽根 あのととき共産党員の福島というのがいましたよね。

伏見 福島要一です。彼は、レッドパージにかかって農林省をやめてから、ずっと無職で、名刺に「日本学術会議会員」としか書いてなかった。しかし、ものすごく頭のよい男で、学術会議の中のいろいろな委員会を切り回してたから、「ミスター学術会議」と言われ、中曽根さんが学術会議は彼で動かされていたと見られるのは、ある程度本当でした。しかし、だからといって、何もかも福島さんで決まっていたわけではないんですよ。

尾崎 昭和二十七年の秋の学術会議でしたね。茅・伏見提案で原子力が初めて議論になったのは。

伏見 そうです。広島大学理論物理学研究所長の三浦剛昂さんが反対演説をやった、それが一番ものを言ったわけです。要するに、三浦さんが茅・伏見提案に対して反対の大演説を三〇分くらいやって、知っているんだから、そこで、これは奇襲作戦以外にない、と。それで、まず同志を説得した。稲葉修、桜内義雄、

川崎秀二、椎熊三郎、そういう腕っ節の強い人を説得したわけです。彼らは初めは何の話かよくわからなかったけれども、よく話をしたら、「それは大変だ。やろう」と。私と川崎は予算

予算が成立したのでジュネーブ会議に行けた

尾崎 そのとき「学者の尻を札束でたたんだ」と言ったとか…。

伏見 そういう表現がありましたね。中曽根 それは私じゃなくて、茅さんなどが政調会に予算反対だと抗議に来たとき、稲葉修がそばにいて「学者が眠っているから、札束でひっぱたいて目を覚ませるんだ」と。ところが、私が言ったことになってるんですよ(笑)。尾崎 それは初めて伺いました。中曽根 稲葉修は、ああいう茶目っ気の強い人でした。

非常に印象的なことは、抗議にきて帰るときに、茅さんが私につぶやいたんですよ。「でっちまったら、仕方がない」

たんです。米ソの対立が解けるまでは、手を出すなという趣旨でした。ご当人は原爆を浴びて、頭にけがをされて、原爆被災者なんです。

尾崎 茅・伏見提案というのがもともと多数の学会の支持を得て出そうなのが、全然反響がなかったと聞いているんですけども、結局、伏見先生と茅先生と二人きりになってしまったんですか。

伏見 初めは第四部会は別に反対じゃなかったですよ。皆さん前向きだったですよ。ただ勉強不足で、何も御存じなかったというのが本当のところかも。

夏休みの前に第四部会というのがあって、そこで「秋の総会には四部会の提案として出しましょう」ということに決まったんですよ。ところが、八月の夏休みの間に若い連中、例えば早川幸男(後の名古屋大学総長)なんというのが聞きつけて、私に直談判に来たりしました。強調しておきたいのは、彼は共産党とは何の関係もない、学問一点張りの若手だったのです。学会のいろいろな集まりでも反対の声が圧倒的で、東大の集まりでは茅さんと一緒にしるし上げにあいまして。

委員会の理事をしていましたから、密かに隠してもっていた。それで、いよいよ最終段階になって修正案として出したんですよ。そうしたら、みんな驚いたわけですよ。そして、各新聞、ラジオが猛反対をしたんです。

あのとときの翌日の新聞を見てごらん下さい。「中曽根が予算を出して、また原爆を作るんだらう」と書かれたものです。「無知な予算」とか、「原爆予算」とか、悪態の限りを尽くされた。と。そう言って帰ったんですよ。これは内心は通してくれということだな、私はそう読みましたね。茅さんはそういう大戦略家でしたよ。伏見 そうですね。中曽根 なかなか勇氣がありましたね。ところが、大反対の新聞、ラジオが出たら、川崎も椎熊も心配して、椎熊が私のところに飛んできて、「あれは評判が悪いから、撤回しようや」と言ってきた。「とんでもない。これを突破しなければ国家はだめになる」と。そう言って追い返して、それで通したんです。そうしたら、参議院はさすがに良識があったので、「衆議院を通つたものをそう否

尾崎 学会では若手が反対して、政治家の若手は推進していたわけですよ。それで、例の二億三五〇万円という語呂合わせの原子力予算はどういうことだったわけですか。

中曽根 これは斉藤憲三代議員といういろいろ積み合わせをやったんです。開発研究、外国視察あるいは学者の養成、準備会・調査会の設置、ウラニウムの探鉱まで全部入れて、語呂のいいのにしようとして35にしました。議会でなぜ235にしたかと聞かれて、「濃縮ウランはウラニウム235だ」と言ったら、爆笑したんです。尾崎 それにしても、三月という予算ギリギリでしょう。

中曽根 あれは突然出さなければ通らなかつたんです。

伏見 突然だから通つたんでしょう。中曽根 私は密かに予算の準備もして、時機をねらっていた。ところが、あのとときの議会は吉田さんの自由党だけでは通らない。重光改進黨と鳩山民黨、この三党が一致して初めて多数になるわけですよ。私は重光改進黨にいた。したがって「この案を強行して出して、吉田自由党が反対すれば、予算は通らないよ」と脅迫材料に使つたわけです。

初めから出せば、新聞やラジオが反対し、できなくなる。学術会議の模様も聞

決するわけにいかん。これをいかに善用するか、ということを考えよう」と、それほど抵抗がなく成立したんですね。

予算が通って、そのおかげで企画庁を中心に準備会ができたんです。石川一郎さんが会長になって準備会ができて、役所としての準備をいろいろ始めたんですよ。その予算が成立したので、第一回の国連主催のスイス・ジュネーブでの国際原子力会議にみんなが行けたわけです。

尾崎 伏見先生は、その仲間には加わられなかつたんですね。

伏見 中曽根さんその他の政治家との折衝は、もっぱら茅さんと藤岡由夫さんがやっていた。

中曽根 ジュネーブの会議は、駒形作次博士が団長で、私と社会党右派の松原重義さん、社会党左派から志村茂吉君、それから自由党から前田政男君、その四人が顧問でついていた。

それで、インドのパールという博士が議長になったのを見て、あの博士はどういう人だと聞いたら、相当深い研究者だという話を聞いて、ますます日本が遅れちゃったという実感をもった。

伏見 パールは、インドの湯川秀樹というべき理論物理学者ですが、有名なタール財閥がつくつたタール研究所の所長です。後になって、インドの原子力政策を

原子力委員会の初会合 左から藤岡由夫、湯川秀樹、正力松太郎、石川一郎、有澤廣巳の各氏（1956.1）



東海村を視察する中曽根氏

調査しに、ボンベイにあるその研究所を訪問して、バーバから説明してもらいました。

その時、今でもよく憶えています。インドの農民は肥料になるべき牛の糞を全部燃料に使ってしまうので、収穫がよくない。糞（タング）を救うために原子力をやるんだ」という説明でした。中曽根 それで、ジュネーブから鳩山首相に「実情はこうだ。だから私は帰って内閣の緊急政策として政策を出すから、取り上げてくれ」と切々たる手紙を出した。今でも残っていますよ。

尾崎 日本の原子力というのは完全に政治、特に中曽根さんの主導で始まった、ということですよ。

中曽根 我々四人がフランスからイギリス、ドイツ、アメリカの研究施設を回ったわけです。この四人は、昼間は研究施設を回り、夜はホテルの一室に集まって議論したわけです。どうい立法をするか、毎晩議論した

るが、毎晩議論した。原子力委員会を作ろう、科学技術庁設置法を作ろう、原子炉規制法が要る、核燃料（原子燃料）やアイソトープの規制が要る、そういうい



でやるようにしたんです。

尾崎 財界、業界の人たちはどうだったんですか。

中曽根 石川さんが非常に理解者で、そして公正な人でした。ですから、あの人がそういう点は説得もし、経団連を中心にお膳立てしてくれましたね。

それで、駒形作次さんという人は工業技術院長をしていた人で、通産省の系統も非常に協力しました。駒形さんと石川さんとの連携で、財界のほうも非常に元気づいて協力してくれましたね。

尾崎 「民主・自主・公開」という茅・伏見提案の一番の根本の部分は取り入れられたわけですね。

伏見 我々の提案は、中曽根提案が出てから大急ぎでつくったんです。

我々の間では「中曽根さんはきつと原子兵器を作るに相違ない。それにはくつわをはめなくちゃだめだ」と（笑）。

尾崎 そうだったんですか。

中曽根 我々も「基本法を作ろう」、そういうことは道中で話していたんですよ。その中で問題になったのは、「民主・自主」はいい。「公開」はどうかな。どの程度公開できるかな」ということで

ろんな問題をやり、原子力基本法を作ろう、と。これは特に松前さんの主張でもあった。そういうことを議論して、帰ったら超党派の原子力合同委員会を作って、立法をやる、と。

それで、羽田に着いたときに、我々四人で共同声明を出して、各党へ帰ってそれに賛成させて、私が委員長になって立法をやる、と。

研究所は東海村に行つて結局よかつた

中曽根 そのときに正力松太郎さんが科学技術庁長官になっていて、正力さんは「おれにはわからん。君に任せるから、お膳立てしてくれ」と。松前さんと相談して、原子力委員は非常に重要だからというので、まず湯川秀樹さん、それから財界では東大の化学の先生だった石川一郎さん、そして社会党系の有澤廣巳さん。そこまでは大体見当がついた。

藤岡さんが「湯川さんは私が一番口説きやすい」ということを私に言っていたことがあるんです。それが成功したわけです。それで、「じゃ、藤岡さんも入れよう」と。

伏見 本当によく知っていますね。尾崎 その後、研究所を、どこに持つていくかということ。茨城の東海村はもとより、横須賀の武山もあつたし、群

す。原子力のような問題は一般に見せたら危険が出る。襲撃されるとか、ノウハウの問題、工業秘密の問題が出てくる。尾崎 ところで最近の原子力は、当時のと打つて変わって、逆風なのは。中曽根 いや、それほどでもないですよ。問題は高速増殖炉の問題なんです。実際は、今の発電の約30%以上を原子力に頼っている。ですから、これを無視して日本の産業の発展はない。

それから公害、環境問題で、化石燃料が非常に弊害をなしてきた。これを救うものは、現実問題として原子力以外ない。

尾崎 当時、学者は若手がみんな反対したわけですが、その方たちも日本を担うような学者になつていらつしやる。伏見 その頃の連中は、原研ができるときにまだ抵抗していたんですよ。それで、原研に入る物理学者たちが非常に限定されてしまった。それは今でも非常に残念だと思ひます。

今だけが逆風ではない初めから逆風だ

尾崎 伏見先生は「今だけが逆風ではない。初めから逆風だ」とおっしゃってますが。

伏見 中曽根さんのつくった路線では、原子力研究所をつくって、最初に例の湯

法作業に入った。しかし、要綱はみんなできていたから、それに沿つて、まず原子力委員会から。あのとき、夜昼寝すに八本法律を作りましたよ。それで原子力委員会設置法ができたときに、誰を原子力委員にするか、という問題になつたんです。

尾崎 そこまでやつたんですか。馬の高崎なども、みんな「うちにきてくれ」という雰囲気でしたよ。伏見 あの当時はもつぱらね。後に関西研究用原子炉の立地問題であんなに苦労したのが、嘘のようですね。

尾崎 東海村に行つて、結局よかつたんでしょうね。中曽根 そうです。私、全部回つてみましたが、港ができる、那珂川の水が引ける、松林の中で人家が遠い、やっぱり東海村がいいなと思つた。

しかし、高崎も火薬廠の跡があつたんです。大きな森があつて、火薬廠ですから、土塁がうんとあつて、変なことが起こつても、土塁で大丈夫。それで「手を挙げろ」と手を挙げさせておいて、「向こうにやるけれども、何か持つてこい」ということで、放射線化学のほうを高崎

それに、ウランがほとんどないような国においては、プルトニウムを再生してある程度増殖的利用というものにいかなければ、もたないじゃないか。そういうこともあつて、高速炉が路線の中に入ったわけですよ。しかし、「もんじゅ」のナトリウム漏れ事故で、停滞しているわけですが、そのコース自体は間違っていない。

ですから、「注意深くある程度時間をかけてやって、研究だけはずつとやるべきだ」というのが今の態度で、否定はしてないと思ひます。

沸かし型原子炉をつくり、それがJRR-1、続いてJRR-2、JRR-3と順序をつけて原子炉をつくっていく、というお話がありました。そのときに、「関西地方にいる大学の先生は東海村までくるのは大変だろうから、関西にも原子炉をつくらうではないか」ということで、関西研究用原子炉という構想が出てきたわけです。それに響くように、京都大学が原子炉を作る予算請求をしたんですよ。

それで、藤岡さんたちの考えている関西研究用原子炉という構想と京都大学の

インド・パキスタンの核実験に関しての中曽根氏の寄稿文を掲載する読売新聞(1998.6.10)



印パ核実験で緊急寄稿

中曽根 康弘元首相
「原子力」は人類の歴史の中で、最も重要な技術の一つである。その利用は、人類の生活に大きな影響を及ぼしている。...

日本から「警鐘」

核廃絶への戦
「核廃絶」は、人類の未来を左右する重要な課題である。日本は、核兵器の廃絶を強く主張している。...

特別対談 黎明期、そして今後の原子力開発は

「原子炉を作りたい」という話とが結びついて、熊取の原子炉をつくることになるわけなんです。
尾崎 立地で大変苦労されたようですね。伏見 宇治の火薬庫跡は、京都大学がもらっていたわけですね。...

中曽根 住民投票は時代の趨勢で、これだけ高度情報化時代になれば、基本的人権の一つとして住民投票というものは出るでしょう。
ただ、それが法律に代わるものであってはならない。地方的な問題が国家的な

に熊取を見つけたわけです。
中曽根さんにご出張を願ったのは、四半世紀という四番目か五番目の候補地なんです。
中曽根 それもだめで、結局、熊取がいいということになったんですね。
尾崎 しかし、今、原子力発電所の立地が重要なにもかかわらず、熱心な政治家の方がなかなかいませんね。
中曽根 今、私は自民党の人間に「一生懸命勉強して、せつせと国会でやっているけれども、みんなパーティ・ビュイロ

「公開」の原則が一番問題だとされたが

尾崎 それにしても動燃のあの「隠し」という体質は良くないですよ。
中曽根 あれはやっぱり金属疲労ですよ。長い間、半象牙の塔のようなところで、特権的プライドと、仕事を狭い視野でやってきた、そういうところにああいうものが蓄積されてしまった。ああいう事件もあって、これで一挙に大掃除が行なわれれば、非常にいいことなんです。
伏見 そうです。しかし、動燃だけがいつも問題にされて、もう一つの原子力研究所のことが話題にならないのは、どういうことかな。
さつき「公開」の原則というのが一番問題だと言われたけれども、新聞記者は「公開」の原則を一番大事にしていたわ

クラット(政党政官僚)になってしまった。ガバメンタル・ビュイロクラット(政府官僚)と非難されたり、いろいろ言われているけれども、パーティ・ビュイロクラットというものが生まれてきて、これが同じようなことになっている。河野一郎とか、そういうような政党政官僚がいな」と言っているんです。
そういうことで、政治家を再訓練しなければならぬときに入りましたね。
伏見 それは非常に重大な指摘だな。確かにそうだ。

問題をスポイルしてはいけない。
伏見 中曽根さんの「政治家の中で制度疲労が起きている」という話はうれしい話だな。
中曽根 私は首相公選論者ですからね。「総理大臣を国民投票で選べ」とずっと言っているんです。
日本は「業の兵器」原爆の仲間に入らない

ある文部省を改革しなければならぬ。
今度、中教審の有馬さんがやるから、新しく思い切って、土光さんのような人を会長にしろと言っているんです。
伏見 それから最後に、今、インド、パキスタンの原爆実験で、原子力兵器問題が騒がしくなっていますが、日本が万一にも原爆には手を出さないという大方針を、この際、再確認しておいた方がいいと思います。
中曽根 もちろん同感です。六月一〇日の読売新聞にも、アメリカのキッシンジャー博士、エジプトのハメド・ヘイカル氏の力の均衡論や隣国との対抗的ナショナリズムに反論して、日本は「業の兵器」原爆の仲間に入らない理由を述べておきました。
尾崎 それでは、どうもありがとうございました。